

「最終的解決」の技術者たち

フォルクハルト・クニッゲ編

訳：柴 壽 雅 子*

Techniker der “Endlösung”

Volkhard Knigge (Hg.)

Übersetzt von Masako Shibasaki*

《訳者解題》

本稿は、「ブーヘンヴァルトおよびミッテルbau・ドーラ追悼所財団」が2005年、「ベルリン・ユダヤ博物館」と「国立アウシュヴィッツ・ビルケナウ博物館」とともに開催した展覧会、『「最終的解決」の技術者たち』のガイドブックの抄訳である。この展覧会は、その副題の「アウシュヴィッツの死体焼却炉を作製した会社、<トップフ&ゼーネ>」が示すように、当時の商用文や書簡や証拠物品を展示して、ごく普通の企業だった「トップフ&ゼーネ」が、SSに強制されたわけでもないのに、効率のよい死体焼却炉の開発に努め、大量虐殺に加担していった経緯を克明に追っている。ガイドブックには実際の展示物の写真も掲載されているが、説明の文章だけでも、その生々しい内容は充分伝わるので、ここに訳出した次第である。

キーワード

トップフ&ゼーネ、ホロコースト、アウシュヴィッツ、ガス室

1) 「トップフ&ゼーネ」——ごく普通の企業

*会社

建築のマイスター、ヨハン・アンドレアス・トップフ（1816年～1891年）が1878年にエアフルトで企業を起こしたとき、それは燃焼装置の製造会社であった。息子のルートヴィヒ・トップフ（1863年～1914年）は「J・A・トップフ&ゼーネ」の名称で事業を拡大し、従業員は500人を超えた。この会社は第一次世界大戦前からすでに、麦芽製造設備とビール醸造に関しては、世界市場をリードするメーカーだった。そのほかに重点が置かれていたのは、ボイラー、煙突、倉庫の製造だった。やがて換気装置が、さらに1914年からは火葬場の焼却炉がそれに加わった。ヴァイマル共和国時代には、ルートヴィヒ・トップフが

*しばさき まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2007.12.17受理〉

任命した重役の下、会社はさらに拡張し続けた。しかし1930年代初頭の世界的な経済危機の煽りを食って、「トップフ&ゼーネ」は支払不能の寸前まで追い込まれた。第三帝国の軍備拡張のおかげで、ようやく1935年には再び売り上げが増加するようになる。

* トップフ兄弟

ルートヴィヒ・トップフは1903年、同名の父ルートヴィヒと母エルザの長男としてエアフルトで生まれた。大学入学資格を取得後、1922年から翌年にかけての冬学期には、ハノーファー工科大学の機械工学科に在籍した。1914年に父が若くして亡くなった後、母親が会社の所有者となっていたが、この母親に対するルートヴィヒの関係は目に見えて悪化していった。裕福な家庭の出身でありながら、彼は大学での勉強のかたわら、肉体労働者、家庭教師、外洋汽船の助手や石炭運搬係として働かなければならなかった。1926年から1931年にかけては、ベルリン、ロストック、ライプツィヒなどで国民経済学、社会学、法学を学んだ。「ドイツにおける麦芽製造」というテーマで博士論文を書き始めたが、1931年には従業員として家業で働き始めた。

1904年生まれのエルンスト＝ヴォルフガング・トップフは、1922年に大学入学資格を取得した後、ハノーファーで商業の見習い訓練を終えた。兄のルートヴィヒと共にライプツィヒへ移り、4年後、そこの商業大学で学位を取った。他に法律も学び、博士号取得を計画していた。しかし兄と同じく母親に強く言われて計画を変更し、1929年に家の会社に入ったが、最初は見習いでしかなかった。

1933年4月末、ルートヴィヒとエルンスト＝ヴォルフガングの兄弟はナチ党员となった。その後、兄弟は社内での影響力をどんどん強めていった。1935年、「トップフ&ゼーネ」は合資会社になり、兄弟は単独で責任を負う共同出資者として、会社の経営を受け継いだ。

* 従業員

「トップフ&ゼーネ」はすでに第一次世界大戦前から従業員数が500人を越え、中小企業ではなくなっていた。年金と住居といった福利厚生や報奨金によって従業員をつなぎとめるのが、会社方針の一つだった。こうした「会社共同体」という基本的な考え方があったため、1933年以降、職場で広がったナチのイデオロギーと政治活動が、「トップフ&ゼーネ」では速やかに進んだ。その一環として、トップフ兄弟を「会社指導者」に任命し、「ドイツ労働戦線(DAF)」に加盟した。従業員数は1939年には最高の1150名となったものの、戦時中は多くの男性が国防軍に召集されたため、その約半分はまで落ち込んだ。その穴を埋めるため、捕虜や強制労働者を会社で働かせたが、ドイツ人の従業員しか会社共同体の一員とは見なされていなかった。「トップフ&ゼーネ」で働いていた共産党员や半ユダヤ人はすでに迫害されたり、それどころか逮捕までされたりしていたが、会社所有者にとっては彼らも会社共同体のメンバーだった。

*製品

1930年代初頭の経済危機の後には、特に貯蔵室の製造が売り上げを伸ばした。第二次世界大戦中、「トップフ&ゼーネ」は、ドイツ空軍の標準型爆撃機、「ハインケル111」の交換部品や手榴弾を初めとする軍需品も生産していた。

製造部門D「燃焼装置」では、1914年から火葬用の焼却炉を開発していた。まもなく「トップフ&ゼーネ」は、この新しい市場をリードする存在となる。とはいえ火葬関係のビジネスは、会社の売り上げ全体のうち、ほんのわずかを占めるに過ぎなかった。1941年、火葬やごみ焼却のための炉の製造を担当する部門、D-4「特殊炉製造」が生まれ、クルト・プリューファーがその責任者となった。

*焼却炉のエンジニア、クルト・プリューファー

クルト・プリューファーは1891年生まれで、父親のヘルマン・プリューファーは機関士だった。実科学校を卒業した後、彼はまず石工の見習いをした。エアフルトの大学で地上工事を6学期間勉強した後、20歳で「トップフ&ゼーネ」に入社し、兵役が始まるまでの1年間、技師として働いた。第一次世界大戦では兵士として西部戦線で戦った。エアフルトに戻り、1920年には大学での勉強を止め、あらためて「トップフ&ゼーネ」で仕事を始めた。

プリューファーの専門は焼却炉の建設で、「トップフ&ゼーネ」がこの市場をリードする役割を果たすようになったのは、彼の功績が大きい。とはいえ焼却炉が会社の売り上げ全体のうちで占める割合はあくまで小さかったので、焼却炉建設に責任を持つエンジニアとして彼に認められた歩合では、給料を増額させることはほとんどできなかった。1930年代初頭の経済危機の間、プリューファーが解雇されずに済んだのは、大幅な給与削減を呑んだからである。

1935年にエンジニア主任に任命されてからも、プリューファーには業務代理権、つまり契約に署名する権限がなかったため、取引の締結は上司に伺いを立てなければならなかった。1933年4月、彼はトップフ兄弟と同時にナチ党に入った。1939年にSSが収容所で焼却炉の建設を始めたとき、プリューファーは名前を売り収入を増やすチャンスが到来したと考えた。

*ドイツにおける火葬

ドイツで最初の火葬場は1878年11月、ゴータで営業を始めた。1914年まで、火葬場はちょうど20しか増えなかった。火葬を支持した最初の人たち、いわゆる火葬主義者は、ブルジョワ階級の人々だった。彼らは協会を結成し、時代に合った葬儀様式として火葬を宣伝した。反対者は、火葬は敬虔さに欠け非キリスト教的だと批判した。

火葬主義者は火葬を普及させるため、その中に伝統的な葬儀文化の諸要素を取り入れた。火葬の神聖な性格を強調するために、建物の建築は教会や寺院を手本にし、死体焼却の機器は地下へ隠したのである。

火葬は低価格であったため、第一次世界大戦後、特に都市の労働者に好まれるようにな

った。1934年になって初めて、火葬と土葬を同等に扱う帝国統一の法律が成立し、この機に乗じて「トップフ&ゼーネ」は、わが社の技術を使えばきわめて厳かな火葬ができると宣伝した。クルト・プリューファーは担当のエンジニアとして、「火葬は死体処理のレベルに落ちてはならず、特に衛生や畏敬の念といった点を考慮しなければならない」と強調している。

2) 収容所のビジネス——秘密を知り、犯罪に手を染めた社員

* S Sの最初の注文

第二次世界大戦が勃発すると、S Sは「トップフ&ゼーネ」に連絡し、強制収容所独特の焼却場で用いる焼却炉を発注した。この新規の顧客が、安価で迅速な死体の焼却をこなせるよう、「トップフ&ゼーネ」のエンジニアたちは、まず移動式の焼却炉を提供し、さらに短期間の内にブーヘンヴァルトとダッハウの強制収容所に設置する固定式炉を開発した。

ポーランド侵攻後、強制収容所へ連行される囚人の数は増加し続け、死者数もさらに増えて行った。ブーヘンヴァルト収容所では1939年末、S Sのせいで初めて大勢の死者が出た。数千人のウィーンのユダヤ人とポーランド人が、いわゆる「ポーランド収容所」の点呼広場に押し込まれ、非常に劣悪な衛生状況と囚人の栄養失調のために赤痢が流行したにもかかわらず、収容所管理部は伝染を食い止めようとせず、囚人を放置したのである。死者数が急速に増大したため、従来のようにヴァイマル市営火葬場で死体を焼却していたのでは追いつかなくなった。そこで「トップフ&ゼーネ」が開発した移動式の「ドップフ焼却炉」が、窮地を救うことになる。クルト・プリューファーはこの炉を、1939年5月にはもう開発していた。開戦と共に強制収容所の囚人数が急増することを見越したS Sが、おそらくそうした炉を開発するきっかけを与えたか、あるいは発注まで行っていたのだろう。この炉は技術的には、「トップフ&ゼーネ」の製品のひとつである牧畜業用死体焼却設備に即している。この種の焼却炉が1939年冬にはブーヘンヴァルトで設置され稼働していたことが、囚人の証言により確かめられている。

収容所の死体焼却設備に対するS Sの需要に促されて、クルト・プリューファーは移動式の「二重マッフル炉」を開発した。収容所焼却場に固定式の焼却炉を設置した後も、死者の数が急速に増えて処理が追いつかなくなるたびに、「トップフ&ゼーネ」は暫定的な解決法として、S Sにこうした移動式の炉を用立てた。

ブーヘンヴァルト収容所のために焼却炉を建設したことが出発点となり、「トップフ&ゼーネ」の経営陣とS Sは、他の強制収容所にも焼却炉を設置することを取り決めた。1941年春までに「トップフ&ゼーネ」は、ブーヘンヴァルト、ダッハウ、マウトハウゼン、ゲーゼン、アウシュヴィッツに新製品の炉を販売した。クルト・プリューファーにとってS Sとのビジネスは、自分の課の売り上げの40%を占めていた。彼は基本給に加えて税込み収益の2%を手数料として得ており、その金額を計算するために売上高を表にまとめている。

「トップフ&ゼーネ」との取引関係と並行して、SSはベルリンの「ハインリヒ・コリ有限責任会社」とも交渉していた。「コリ」は小さな会社で、死体とゴミの処理設備ならびに暖房設備の製造を専門とし、1940年初頭にはすでに、「安楽死作戦」で約7万人が一酸化炭素で毒殺された療養所や養護施設において、死体の焼却炉を設置していた。「トップフ&ゼーネ」と「コリ」は、強制収容所の受注を巡って競争していた。収容所の焼却炉のほとんどすべては、両社のどちらかが設置している。

*収容所における死体焼却の実際

「トップフ&ゼーネ」は1941年までに、二種類の「二重マッフル炉」を強制収容所に取り付けていた。最初に使われたのは組み立て済みの移動式炉で、これは壁にはめ込んで固定することもできた。やがてそこから開発された固定式の炉が使われるようになったが、これは収容所でまず部品を組み立てた。どちらのタイプも、通常の火葬場で使用されるものとは大きく異なっていた。収容所では死者はもはや一人一人別々に棺に入れて焼却したりしない。それゆえ燃焼室の扉は随分小さくすることができる。また扉の開閉も機械ではなく、囚人が手で行なわなければならない。さらに死体は直接、炎に晒される。通常は死体を入れる部分と火室との間に仕切りがあるのだが、収容所の炉にはそれが無いのである。

通常の火葬場では、充分な酸素の供給に留意し、死体がすっかり焼却されるまで時間をかけ、焼却中に煙や匂いが出ないように注意するが、収容所における死体処理ではそのような配慮は脇に追いやられる。収容所で重要なのは、処理スピードと燃料費の節約なのである。それゆえ死体は不完全にしか焼却されず、火の粉が舞い、黒い煙と悪臭が出た。「トップフ&ゼーネ」が作成した収容所の死体焼却炉の操作マニュアルによると、焼却過程の終了前にさらに死体を燃焼室へ入れるように指示されており、死体と灰を火かき棒で動かせと明記されているのである。

「トップフ&ゼーネ」は強制収容所に、特殊な死体焼却炉や火かき棒などだけではなく、耐火性マーク、遺灰を入れる容器、さらにその蓋に印字する器具も納入していた。印字された蓋と耐火性マークは本来、死者に畏敬の念を表し、火葬法の法的規則に従って、誰の灰が容器に入っているかを間違いなく明示するために用いられていた。しかし強制収容所では、それらの目的は全く別だった。収容所の炉では死体は個々に焼却されず、どれが誰の遺灰かは分からなくなってしまうので、通常の火葬用のマークや蓋を使って、そうした収容所の実情を隠したのである。1942年頃までは、ブーヘンヴァルト収容所で亡くなった「ドイツ帝国国民」の囚人の遺族は、料金を払えば遺灰を要求することができていたので、そのような場合、容器に適当に灰を入れ、耐火マークを付け、蓋には相応の事柄を記載していたのである。

*ビルケナウ——新たな注文

アウシュヴィッツの基幹収容所から約3キロ離れたところに、ビルケナウ収容所を建設する計画が立てられ、1941年の秋以後、「トップフ&ゼーネ」には新しい注文が来た。ビルケナウは当初、ソ連の捕虜を対象にした巨大な収容所になるはずだった。それゆえ大き

な死体焼却場を作ることが計画され、そのためSSの中央建築施工部は高性能の炉を必要とした。それに応えてクルト・プリーファーは、「三重マッフル炉」を開発した。しかしながらビルケナウ収容所は、建設が終わらないうちに新しい機能を持たされ、絶滅収容所に変わり、ヨーロッパのユダヤ人とシンティ・ロマを殺害する民族殺の中心地となったのである。

ビルケナウ収容所も含めたアウシュヴィッツ複合収容所に、5基の「三重マッフル炉」を提供する契約が結ばれ、それを確認する1941年11月4日付けの文書で、エルンスト＝ヴォルフガング・トップフは新商品の高性能振りを強調している。炉室が大きくなったので、より多くの「凍った死体」さえ簡単に焼却できるようになったと言うのである。クルト・プリーファーは「三重マッフル炉」の炉室の間に開口部を設けたので、そこを通じて何の障害もなく炎が噴き出せるようになっていた。今や遺灰が誰のものかは、技術的な理由からも区別できなくなった。経済的な利点としては、中央の燃焼室用の火室をなくしたことが挙げられる。

1941年の秋以後、アウシュヴィッツのSSは、殺虫剤として収容所に大量に置いてあったチクロンBを、人間の殺害に用い始めた。そのために、まず基幹収容所の焼却場の地下にある死体置場が使われたが、1942年春、収容所管理部はビルケナウ収容所の近くにあった二軒の元農家をガス室に改築し、「営倉Ⅰ」「営倉Ⅱ」とした。そこで殺された多くの人々の死体は、一旦はまとめて埋められたが、後に野外で燃やされた。

1942年の初夏以後、アウシュヴィッツにはドイツならびにヨーロッパの占領地から、ますます多くの人々が追放され移送されてきた。SS国家長官のヒムラーは1942年7月17日と18日にアウシュヴィッツを視察した際、「労働不能」のユダヤ人を到着後すぐに殺害する現行のやり方を承認し、収容所を速やかに拡張するよう命じた。それに伴い、ビルケナウにさらに三つの焼却場を建設する計画が持ち上がり、1942年8月19日、クルト・プリーファーとの協議が行なわれた。新しい焼却場のうち二ヶ所では、すでにエアフルトで出来上がっている「八重マッフル炉」を用いるよう、プリーファーは勧めた。八重マッフル炉は白ロシアのモギリョフにあるSSの収容所のために組み立て済みだったが、買い取られなかったからである。協議で確約されたのは、これら二つの焼却場を「特別行動のための浴場施設」の近くに建設するということである。戦後に行なわれた尋問でプリーファーは、「特別行動のための浴場施設」がガス室を意味することを知っていたと語っている。三番目の焼却場の地下室は常時ガス室として使えるようになっており、窓のない部屋ではガスを出して新鮮な空気を入れることがまず不可能なので、換気装置を付けることになっていた。

アウシュヴィッツ基幹収容所の焼却施設が「第一焼却場」と見なされていたため、ビルケナウの焼却場には第二、第三、第四、第五の番号が振られた。ただしこれらの焼却場は、最初から大量の殺害と焼却を結合させた場所として構想されていた点が新しかった。計画と建設を担当していたのはアウシュヴィッツのSSの「中央建築施工部」で、そこでは約30人のエンジニアと建築家が、建築技師のカール・ビショフの下で働いていた。ビショフの直属の上司は収容所の所長ではなく、SS国家長官のハインリヒ・ヒムラーだった。焼

却場の建設に際しては、中央建築施工部の委託を受けて、12の民間会社関わっていた。これらの会社の従業員はしばしば何ヶ月間も建設現場で働き、工事に動員されている囚人の仕事も監督していた。「トップフ&ゼーネ」は大量殺戮施設の技術における主要な要素に責任を持っていたため、下請け会社の中でも中心的な位置を占めていた。

大規模の注文のときはいつもそうだが、エアフルトでは会社の数々の部門が、アウシュヴィッツからの注文の処理に携わっていた。管理部が提供価格を計算し、様々な工場が炉の部品を製造し、配送課が梱包して鉄道で送付し、会計課が帳簿を付けた。その際クルト・プリューファーは、絶えずベルリンのSS中央当局と連絡を取っていた。1942年9月8日、彼は上司に、「SS経済管理本部、土木建築課課長の代理で、ハンス・カムラーSS少将より電話があり、もっと多くの焼却炉を求められた」と報告している。プリューファーの計算によると、それまでに計画されたビルケナウのどの焼却場においても、1日に付き800人の死体を焼却することができた。

*秘密を知った上での共犯

「トップフ&ゼーネ」は、ビルケナウの大焼却場の炉を提供しただけでなく、その地下にあるガス室に取り付けられた換気設備も納入していた。すでに計画の段階で、エンジニアたちはガス室の機能を知っていた。クルト・プリューファーは少なくとも十回以上ビルケナウを訪れており、彼の同僚で送風機製造課の課長、カール・シュルツェは何度も同行している。作業報告書を見れば明白なように、ビルケナウで設備の建設を率いた「トップフ&ゼーネ」の組み立て工たちは、自分たちが設置した設備が何のために使われるかを知っていたのである。

ビルケナウでは、「トップフ&ゼーネ」の組み立て工が4名働いていた。そのうちの一人、ヴィルヘルム・コッホは、第二・第四・第五焼却場の炉ならびに第二焼却場のごみ焼却炉の建設に、少なくとも九ヶ月間、従事していた。また別の組み立て工、マルティン・ホリックは、ビルケナウに一年ほど滞在しているが、その前にまずブーヘンヴァルト収容所で「三重マッフル炉」の設置に携わっていた。当時そこでソ連の捕虜が生きのまま炉室で焼かれるのを見たという、元囚人の証言がある。

マルティン・ホリックはヴィルヘルム・コッホとともにビルケナウで、とくに第二焼却場の炉の建設を監督した。1942年末、埋められていた5万人の死体を掘り起こして野外で焼いたときにも、二人はビルケナウにいたのである。

換気設備の組み立て工、ハインリヒ・メッシングは、1943年1月から6月までビルケナウに滞在した。1943年3月に第二焼却場の地下室（脱衣場とガス室）の換気工事をしたとき、一週間で35時間もの残業を行なったが、その労働証明の中で彼は偽装のためのSS用語、「死体安置場」を使わず、ずばり「脱衣場」と記載している。そこから分かるように、実際にはどのようにこの部屋が使われ、どのような段階を踏んで焼却場で大量殺人が遂行されるかを、メッシングは知っていたのである。

1943年2月17日付の電話メモのような社内資料が証明しているように、アウシュヴィッツに一度も行ったことはないが、エアフルトで受注処理に当たっていた従業員も、焼却場で

ガス殺を実行しようとしていることを知っていた。また、このメモには「ガス地下室」という言葉が出てくるので、大量殺戮のための技術提供が、社内では当たり前のように扱われていたと思われる。手書きのサインは、このメモがルートヴィヒ・トップフ、グスタフ・ブラウン営業部長、マックス・マッヘメール営業支配人、フローレンティン・モック仕入部長の手を經ていたことを示している。アウシュヴィッツのカール・シュルツェがフリッツ・ザンダーと電話で交わした話を筆記したのは、ザンダーの部下のアンネリーゼ・ヘスラーである。「特別文書」という判は、この書類が経営陣によって処理されたことを示唆している。

エンジニアのクルト・プリューファーとカール・シュルツェは、アウシュヴィッツのSSにとって、単なる受注先の正式代表ではなかった。ベルリンのSS本部から建築施工部に圧力がかかるたびに、SSがまず相談を持ちかけたのが彼らだった。新しい焼却場でさらに効率よく大量殺害を遂行するには、どうすればよいかという問題について、プリューファーとシュルツェはSSに助言と助力を与えたのである。

SS国家長官のハインリッヒ・ヒムラーは1943年1月末までに第二ならびに第四焼却場を完成せよと命じていたが、その期限が守れなくなったとき、アウシュヴィッツの中央建築施工部は困難な状況に陥った。そのためクルト・プリューファーはSS専用の用紙を使って焼却場建設全般の進捗状況報告書を作成し、「大規模な建設であり、天候や資材の調達といった問題があるものの、作業は順調に進んでいる」とSS建築施工部に確証した。SS建築施工部長のカール・ビシヨフはこのプリューファーの報告書を、SS経済管理本部の土木建築課長、ハンス・カムラーに送っている。

クルト・プリューファーは1943年2月、ガス殺の効率を高める方法をSSに提出している。チクロンBは約26°Cで殺生能力が最大になるので、焼却炉の廃熱であらかじめガス室の温度を上げることを提案したのである。この廃熱利用は、性能を高めるために炉に取り付けられた誘引通風機の冷却にも役立つはずであった。プリューファーの提案はSSによってすぐに実行された。しかし炉への負荷が高すぎて、誘引通風機があまりに過熱したため、それらを解体せざるをえなくなり、結局、ガス室を廃熱で暖めることもできなくなった。

1943年3月、二人のエンジニア、プリューファーとシュルツェの監督の下、ガス室と焼却炉が稼動を開始した。このこと、すなわち焼却場で大量殺戮が始まったことを、二人はエアフルトの経営陣に連絡している。

3) 死の工場の操業

*ビルケナウの焼却場

1943年春、新たな四つの焼却場が運転を開始したことにより、アウシュヴィッツのSSは本格的な「死の工場」を自由に使えるようになった。歴史上初めて、ベルトコンベアーに人間が殺害され、焼却されるようになったのである。

第二焼却場と第三焼却場は設計が同じで、ハウプトラーガー通りの端にあった。どちら

も地下にガス室が一部屋ずつあり、一度に2000人を収容できた。特別の訓練を受けたSS隊員が、天井の注入孔からチクロンBをガス室へ投げ入れた。「トップフ&ゼーネ」が提供し設置した換気設備により、毒ガスを含んだ空気と新鮮な空気の交換を速やかに行なえたので、あまり間を置かずに次々と毒殺を実施することができた。ガス室の前にある地下の部屋は、脱衣場として使われた。焼却室は1階にあり、「トップフ&ゼーネ」の「三重マッフル炉」が5基備え付けられていた。

第四焼却場と第五焼却場も設計が同じで、経費のせいで地下室は設けられなかった。これらは最初、「第一営倉」と「第二営倉」で殺害された人々を焼却する施設になるはずだったので、それゆえ営倉に近い収容所の北西部に建設された。まだ建設中の1943年初頭、SSは第四焼却場と第五焼却場にも、それぞれ最高2000人を収容できるガス室を作ることにした。これらの焼却場の稼動開始後、第一営倉と第二営倉は使用停止となった（第二営倉は1944年に利用が再開された）。第四焼却場と第五焼却場ではチクロンBを、外壁に設けられた注入孔からSSが投げ入れた。脱衣場として用いられたのは、建物の中央にある大きな部屋と中庭である。焼却室には「トップフ&ゼーネ」の「八重マッフル炉」が設置されていた。

第二から第五の焼却場では、人々の最後の所有物が一時的に保管されていた。特に女性の死体から切り取った髪の毛は原料として再利用するため乾かし、金歯や装飾品は溶かし、死体は解剖したりしていた。

四つの焼却場は電気を流している有刺鉄線と監視塔によって、収容所の他の領域から隔てられていた。犠牲者を騙して静かにさせておくために、焼却場の表示板には「浴場・消毒所」と書かれていていた。脱衣場に番号を振った衣服掛けを取り付け、第二焼却場と第三焼却場のガス室にシャワー口の模造品を設置したのも、同じ目的のためである。

ビルケナウの焼却炉の燃焼室（マッフル）では、30分で3人から5人の死体を同時に焼却することが出来た。それゆえ1日で、第二焼却場と第三焼却場ではそれぞれ2500人、第四焼却場と第五焼却場ではそれぞれ1500人の死体を焼却することが可能だった。しかし1944年の夏にハンガリーのユダヤ人の殺戮が始まり、アウシュヴィッツでの絶滅作戦がピークを迎えて毎日9000人以上が殺されたとき、焼却場だけでは追いつかなくなり、SSは地面に掘った穴でも死体を燃やした。

焼却場の操業のために、SSは主としてユダヤ人の囚人からなる「特別作業班」を編成した。彼らのうちから、「死の工場」という言葉が生み出された。特別作業班のメンバーは、人々が速やかに服を脱ぐよう取り計らわなければならなかった。また彼らは死体をガス室から引きずり出し、義足を外し、装飾品を探し、金歯を抜き、一定の長さ以上の髪の毛を切ることで強制された。焼却炉か焼却用の穴での作業や、遺灰の除去もやられた。昼と夜間の二交代制で働かされた特別作業班の囚人数は、1944年の夏には約900名に達した。特別作業班のメンバーは定期的に殺されていった。1944年の10月7日、アウシュヴィッツで唯一の武装蜂起を起こしたのは、彼らである。第四焼却場に火を放ち、三人のSS隊員を殺害することに成功したが、この反乱中と反乱後に、451名の特別作業班の囚人が亡くなった。

焼却場での殺害に先立って、「選別」が行なわれた。すなわち、移送されて来た人々を、SSの医師が「労働可能」か「労働不能」に分けるのである。ほとんどの人々、特に子ども、幼児を抱えた母親、妊婦、老人、病人は「労働不能」と判断され、厳しい監視の下、すぐに焼却場へ連れて行かれて殺害された。「労働可能」な者たちには、収容所での奴隷労働が課せられた。

アウシュヴィッツでは、ガスや射殺、虐待や悪しき生活条件のせいで、少なくとも110万人が亡くなった。ヨーロッパ各地から連れてこられた96万人以上のユダヤ人、7万5千人に及ぶポーランド人、2万1千人のシンティ・ロマ、1万5千人のソ連軍捕虜、1万5千人の様々な国籍の囚人が、ここで殺害されたのである。犠牲者から奪った所有物は、切り取った髪の毛や抜き取って溶かした金歯や義足と同様、貨車でドイツ国内へ運ばれて利用された。

* 死の工場の証拠

SSは大虐殺を隠蔽しようと骨を折ったが、直接的な証拠がいくつか存在する。

特別作業班の囚人は1944年の夏、殺害と焼却の様子を密かに撮影した3枚の写真を、収容所の外に持ち出すことに成功した。

ある囚人は、イニシャルがM・Mということしか分かっていないが、ビルケナウで体験し観察したことをスケッチに残した。そこには選別や、ガス室へ行く途中の犠牲者も描かれている。ビンに入れてビルケナウの病棟の土台に隠された彼のスケッチ帖は、1947年に発見された。

特別作業班の囚人は秘密の報告書もいくつか作成し、それらを密書として焼却場の近くに埋めた。解放直後、生き残っていた特別作業班のメンバーは、調査委員会に対して証言を行なった。絶滅施設の残骸も、大量殺戮の証拠となっている。

1944年5月末、ハンガリーのユダヤ人がビルケナウの降車場に到着し、選別され、引き続いて焼却場へ歩いて行くところを、SSの鑑識課が撮影している。おそらく収容所司令部に依頼されたのだろう。これらの写真にはSSの姿はなく、人々に加えられた暴力も写っていないが、意図せずして囚人の証言が正しいことを証明している。

4) SSの仲間としての「トップフ&ゼーネ」——自発的行動と利益

* 特許の出願

ビルケナウの4つの大焼却場がまだ建設中だったとき、少なくともそれに関わった「トップフ&ゼーネ」のエンジニアには、ナチによる人間の絶滅は一過性の現象ではなく、アウシュヴィッツのために開発した設備では不十分であることが明らかになったに違いない。それを解決するため、クルト・プリューフアーとフリッツ・ザンダーは、新たな高性能炉に関して、それぞれ別の提案を行なっている。彼らはすでに知られていた産業的な焼却技術を利用して、死体焼却の効率を最大にしようとしたのである。

課長兼支配人のザンダーは、「大量処理のための連続稼動式死体焼却炉」を考案した。

彼はまもなく他の会社も同様の炉を構想すると考えていたので、この新製品の特許申請をするようトップフ兄弟に頼んだところ、実際に申請が行なわれた。後のザンダーの供述によると、国の特許局から特許を授与されるに至らなかったのは、この発明が秘密保持のために公式に登録できなかったからである。それでもザンダーによると、文書が作成されて特許番号も伝えられたとのことである。

フリッツ・ザンダーは巨大なゴミ焼却施設に倣って、5階建ての炉を計画した。そこでは流れ作業ラインのように死体は横向きで炉へ入り、それから斜めの火格子に乗って滑り落ちて行き、すでに燃えている死体の上に乗って火がつく。そのため最大2日間加熱すると、燃えている死体だけで燃焼を保てるので、燃料を加えずとも炉は稼働を続けられるという。

クルト・プリューファーは、ザンダーが考案した大量焼却炉が実際にはうまく機能しないと考えていた。死体の断片が火格子にこびりついて炉が詰まってしまうだろうと言うのである。それゆえプリューファーは別の解決法を求め、第六番目の焼却場として「輪形焼却炉」の建設をアウシュヴィッツのSSに提案した。これはレンガを作る大きな環状炉からアイデアを借りたもので、その正確な仕組みは現在残っている記録からは判明しない。ともかくSSは1943年初頭にこの炉の計画を始めたが、建設はされなかった。当時のアウシュヴィッツ収容所長、ルードルフ・ヘースの陳述によると、このプロジェクトは1944年に再び取り上げられた。地下の施設として「輪形焼却炉」の建造が計画されたものの、前線が近づいてきたため、実現には至らなかった。

* 意見の衝突、自負心、個人的利益

会社の経営陣や役職付きの社員の自負心は、専門の能力と業績に限られてはいなかった。取引に関して見解が対立するときでさえ、彼らはSSと同格だと考えていた。このことは日常的な会社の文書のやり取りが証明している。たとえば「トップフ&ゼーネ」は、SSの支払いが滞ると警告を発している。設置した設備が故障すると、どちらに責任があるのかという点で、争いも辞さなかった。保証期間もSSとは違ったように見ていた。この会社は決して命令の受け手ではなかったのである。

収容所のビジネスは、「トップフ&ゼーネ」が期待したほど収益の高いものには決してならなかった。平均すると、総売上高の1~2%にしかっていない。

関係者のごくわずかだけが得られた個人的利益としては、威信の獲得、賞金やわずかな昇給があり、稀ながら国防軍への召集から解除された例（いわゆる「勤務を理由とした兵役免除」）もある。例えばルートヴィヒ・トップフは1941年9月、チューリンゲンのバート・ランゲンザルツァにおける建設補充大隊への動員を、SSのおかげで取り消すことに成功した。ヴァイマルの軍司令部は、「トップフ&ゼーネ」が提出したルートヴィヒの「勤務を理由とした兵役免除」の依頼を、それまで何度か拒否していた。クルト・プリューファーが一計を案じ、アウシュヴィッツのSS建築施工部長、カール・ビショフが、「三重マッフル炉」の設計者であるルートヴィヒに至急来てもらいたがっている、という依頼書を作り上げると、初めて動員が解除された。おかげでルートヴィヒは勤務を理由に

した軍務の休暇がもらえた上、国防軍に復帰する必要もなくなったのである。SSの仕事に関わっていたエンジニアや組立工も、動員されなかった。「勤務を理由とした兵役免除」は、会社の他分野の社員にも与えられていた。

*クルト・プリューファーの退職願——活かされなかった機会

「トップフ&ゼーネ」とSSのビジネス関係は、成功するも失敗するもクルト・プリューファー次第だった。炉の製造に従事する社内唯一のエンジニアだった彼は、使用されるに至った収容所の炉をすべて開発した。プリューファーと会社経営陣との関係は、いつも良好だったわけではない。彼にとって、給料や社内での地位は満足の行くものではなかったからである。1930年代初めに企業が危機に陥った際、給料の半減を甘受せざるを得なくなり、その後、会社の業績がよくなっても、給料はほんのわずかしか上がらなかった。プリューファーは給与の他に、自分が処理した注文による税込み収入の2%を手数料として得ていた。しかし収容所との取引で売り上げが伸びたにもかかわらず、彼は満足しなかった。それゆえ1941年2月、プリューファーは辞職を願い出た。

プリューファーの辞職を機に、トップフ兄弟はSSとのビジネス関係を難なく打ち切ることもできた。だが、プリューファーとのたび重なる対立——たとえば人事の決定や予測のまずさをプリューファーから批判されていた——にもかかわらず、トップフ兄弟は辞職願を受理せず、「緊要な課題」に携わっているからという理由で、プリューファーを慰留した。彼の昇給を認めたものの、手数料の取り決めはなくなった。結局、月給が24ライヒスマルク（収入の5～6%）上がり、プリューファーは「トップフ&ゼーネ」で働き続けることになったのである。

クルト・プリューファーは、自分の熱心さや業績を経営陣に強調する機会を決して逃さなかった。報奨金であれ昇進であれ、自分の功績を認めてもらおうと努めた。たとえばブーヘンヴァルトで「三重マッフル炉」の操業が開始したことを理由に賞金を要求し、450ライヒスマルク獲得している。

*いつでも御用命のままに——終わりなき協力

1945年1月にアウシュヴィッツの焼却場を爆破する前に、SSは炉の部品やガス室の換気装置のような絶滅施設の重要部分を解体させた。戦争が終わる3ヶ月足らず前、オーストリアのマウトハウゼン収容所近くに計画された絶滅施設で、それらの再利用を目論んだ。その際にSSが助力を求めると、「トップフ&ゼーネ」は進んで援助を行なった。会社の経営陣は任務を引き受けて構想を練り、解体された送風機と炉の部品を取り付けたのである。1945年2月10日付けのマウトハウゼンのSS建築施工部に宛てた商用文書からは、「三重マッフル炉」10基がその施設の装備の半分をなしていたことが分かる。したがって計画されていた最大稼働能力は、少なくともビルケナウの焼却場に匹敵するものとなる。

*焼却炉の製造者、所在地、型

SSは主要な収容所では、どこでも焼却場を建設した。焼却炉のほとんどすべてを供給

した会社が「トップフ&ゼーネ」と「コリ」である。「コリ」が建造した炉は例外なく「一重マッフル炉」であったのに対し、「トップフ&ゼーネ」はもっぱら複数のマッフル（燃焼室）を持った炉を設置した。移動可能な炉は通常、石油を使っていたが、戦争で液体燃料が不足したため、後に一部の移動式炉にはコークスガス発生装置が備え付けられ、コークスを燃やすために壁で取り囲まれるようになった。

「トップフ&ゼーネ」はSSに炉を提供するだけでなく、遺灰を入れる容器、印字する器具、耐火性マークを、自社のみならず「コリ」の炉がある収容所にも納入していた。ビルケナウでは第二焼却場と第三焼却場の換気設備を設置し、第四焼却所と第五焼却場のガス室のためには排気設備を納入した(実際に取り付けられたのは第五焼却所だけである)。さらに衣服の消毒のための殺菌設備も建造し、第二焼却場と第三焼却場にはゴミ焼却炉も設置した。また第三焼却場のための暫定的解決策として、エアフルトのリンゼ社から死体用エレベーターを入手した。第二焼却場と第三焼却場のために、非常に高性能の死体用エレベーター二台の注文を「トップフ&ゼーネ」は受けたが、これらは設置されなかった。

ブーヘンヴァルト収容所では、武器工場——囚人が強制労働に従事しなければならなかったグストロフ工場Ⅱ——の射撃場、ならびにブーヘンヴァルトのSS兵舎の換気装置付き暖房器具も、「トップフ&ゼーネ」が提供している。

5) 戦後——痕跡の確保、記憶、否認

*アウシュヴィッツにおける痕跡の除去と探索

すでに1944年の夏から、SSはアウシュヴィッツにおける殺戮の証拠をすっかり除去しようと躍りになっていた。特別作業班の囚人のような証人は殺害し、文書は破棄し、死体を焼いたり遺灰や骨の一部を隠したりしていた穴には、囚人を使って土を入れて植物を植えた。1945年1月20日、SSは第二焼却場と第三焼却場を爆破した。第四焼却場は特別作業班が蜂起した際に一部が崩壊したので、1944年10月半ばにすでに撤去されていた。第五焼却場は最後まで殺害と焼却のために用いられ、収容所の解放の前日になって初めて爆破された。

1945年1月27日、赤軍の兵士がアウシュヴィッツにまで来た。破壊が間に合わなかった貯蔵所で、彼らは大量殺戮の状況証拠を発見した。莫大な量の衣服、靴、義足、髪の毛、ならびに犠牲者から奪い取った品々が残されていたのである。アウシュヴィッツの焼却場の残骸は最初の捜査の対象となった。生き残った囚人たちは、ソ連の調査委員会とポーランドの調査委員会のメンバーに、絶滅施設の機能を説明した。これら二つの委員会は、発見された文書も分析した。

1945年5月の初めにはもう、ソ連の調査委員会が最終報告書を提出した。そこには厳しく罰すべき約50人のリストが含まれており、クルト・プリューファーは「トップフ&ゼーネ」の代表者として、リストのかなり上の方に名前が挙がっていた。

*記憶と否認

かつての収容所の焼却場やその残骸は、今日では追悼と記念の中心地である。また数多くの犠牲者の象徴的な墓場ともなっており、遺族やその他の訪問者が石や花や花輪を捧げている。

それと同時に、焼却場は絶滅作戦の証拠でもある。しかしナチの犯罪を否認する人々は、「ガス室などなかった。大量殺戮、特にホロコーストなど起きなかった」と繰り返し主張してきた。彼らは焼却場が絶滅のための施設だったことを否定し、あれほど多数の人間を殺して燃やすことは技術的に不可能だと疑っている。

*「トップフ&ゼーネ」に対する最初の捜査

ナチの犯罪は多くの資料から証明できる。ただ、絶滅施設である焼却場の建設史と技術に関する資料は長いあいだ注目されず、1980年代に入って初めて研究が始まった。それと共に、「トップフ&ゼーネ」がSSの犯罪に関与していたことが、テーマとして取り上げられるようになっていった。パリ出身で、元はホロコーストを否定していた薬剤師のジャン＝クロード・プレサックは、アウシュヴィッツの中央建築施工部の文書と焼却場の技術的な細部について取り組んだ最初期の一人で、自らの研究に基づき、ビルケナウの焼却場で大量殺戮は可能であり、実際に起きた、という結論に至った。

プレサックは「トップフ&ゼーネ」の資料集も探し出そうとした。現地のエアフルトでは、当時はまだ会社の過去に関心が持たれていなかった。「トップフ&ゼーネ」は東ドイツで営業を続け、民営化された企業となっていたが、プレサックの情報によると、経営陣は彼に証拠書類を引き渡したという。2003年に彼が亡くなった後、その資料は友人や親戚の尽力でドイツへ戻り、「テューリンゲン州中央公文書館ヴァイマル」に納められることになった。これらの文書は今では自由に利用でき、「トップフ&ゼーネ」に関する研究の新たな基礎となっている。

*ソ連に逮捕された4人のエンジニア

「トップフ&ゼーネ」が設置した焼却炉には、慣例に従い社名プレートが付いていた。1945年4月11日にブーヘンヴァルト収容所が解放された後、このプレートが手がかりとなってアメリカの捜査官はエアフルトに赴いた。

クルト・プリューファーはアメリカの捜査官に逮捕されたが、たった2週間で釈放され、「トップフ&ゼーネ」で仕事を続けた。1945年7月、テューリンゲンがソ連の占領地区となり、1946年3月、ソ連の将校が「トップフ&ゼーネ」の主要な社員、すなわちクルト・プリューファー、グスタフ・ブラウン、フリッツ・ザンダー、カール・シュルツェを逮捕した。死の工場を作り上げるのにプリューファーが中心的な役割を果たしたことは、すでに1945年5月、ソ連軍のアウシュヴィッツ調査委員会が明らかにしていたので、彼はベルリンとモスクワで尋問を受けた。その際、元囚人の陳述やアウシュヴィッツで発見された書類が彼に突きつけられた。

クルト・プリューファーは自分がしたことを否認しなかったものの、罪の意識は見せな

かった。1948年、彼は「民間人と赤軍兵士捕虜に対する犯罪」を幫助したかどで、懲罰収容所25年の刑を言い渡された。ソ連側の申し立てによると、ブリューファーは1952年10月、脳卒中で死亡している。フリッツ・ザンダーは逮捕後、数週間もしないうちに心臓衰弱で亡くなった。グスタフ・ブラウンとカール・シュルツェはブリューファーと同様、懲罰収容所25年の判決を受けたが、1955年には釈放された。

* 自分を犠牲者に仕立てたルートヴィヒ・トップフ

1945年5月30日にクルト・ブリューファーがアメリカの捜査官に捕まったとき、ルートヴィヒ・トップフは自分も逮捕されるのではないかと恐れ、その夜のうちに自殺する決心をした。遺書の中で彼は自らを、不当に迫害された無実の人間に仕立てている。弟のエルンスト＝ヴォルフガングと妹のハンナには見捨てられたと感じていたので、ルートヴィヒはこの二人を相続人から外した。1945年5月31日の朝、彼は毒をあおって命を絶った。享年41歳である。

* 西側におけるエルンスト＝ヴォルフガング・トップフ

占領国が変わる前の1945年6月に西側へ旅行していたエルンスト＝ヴォルフガング・トップフは、ソ連当局から帰還の許可を得ることができなかった。そこで彼はヴィースバーデンで新たに「トップフ&ゼーネ」を設立しようとした。エアフルトにあった会社と異なり、この新しい「トップフ&ゼーネ」では火葬場の焼却炉とゴミ焼却炉の製造を中心にするつもりだった。そうすれば一番成功しそうだと、エルンスト＝ヴォルフガングは考えていたのである。

しかしながら、彼は過去に追いつかれることになる。1957年、ジャーナリストのライムント・シュナーベルが『モラルなき権力。SSの記録』を出版したが、この本にはSSとのビジネスを証明する「トップフ&ゼーネ」の二つの文書が掲載されていたのである。それに対してエルンスト＝ヴォルフガング・トップフは数ページの反論を行い、文書は本物ではなく、「倫理的にも事実的にも、わが社の誰にも罪はない。ヒトラー帝国の12年間におけるわが社とその全行動を表す言葉は、<モラルなき権力>などではない」と主張した。彼は終生、「トップフ&ゼーネ」の製品は予期せぬ仕方で悪用されたという見解にしがみつき、「罪なき焼却炉」という考えを固持した。

会社は再建されたものの、最初から運営に苦勞していた所に、ライムント・シュナーベルが公開した二つの証拠文書に追い討ちをかけられ、安定した経営ができなくなった。

エルンスト＝ヴォルフガング・トップフは、法的には一度も訴追されていない。非ナチ化審査機関による訴訟手続きは成果がなく、ヴィースバーデンの検察庁による殺人幫助容疑の捜査手続きも同様に無効だった。

エルンスト＝ヴォルフガング・トップフは結局、さして技術のいらないゴミ焼却炉の設計と製造を専門にしたが、会社は1963年に破産した。1979年2月23日、彼は74歳でブリロンにて死亡した。

***東ドイツにおける「トップフ&ゼーネ」**

ブーヘンヴァルト収容所の解放後、「トップフ&ゼーネ」が疑惑を持たれたとき、経営陣は迅速に対応した。ルートヴィヒ・トップフは1945年4月27日にはもう経営委員会と会合を持ち、収容所のビジネスに関して口裏を合わせた。「この件について尋ねられる」可能性が充分あるからというわけだ。彼は次のような弁明方針を打ち出した。「SSとのビジネス関係はごく普通のもので、強制収容所へは通常取り扱っている火葬用焼却炉しか納品していない。そのうえ、命令されたときしか取引はしていないが、それでももっとひどい災厄である伝染病を予防できた」。経営委員会はこれに同意し、それゆえ懸念すべきことはないと考えていた。

それどころか1945年11月末でもなお、会社が資産の概算のために「テューリンゲン管理局 エアフルト」に提出した特許と特許申請のリストには、ザンダーが開発した「大量処理のための連続稼働式死体焼却炉」の特許申請が挙げられていた。

「トップフ&ゼーネ」は短期間の休業の後、1945年6月には再び食料品産業の設備の製造を許された。1945年7月に赤軍が進駐してくると、野戦炊事車やその他の賠償品に製造を切り替えた。「トップフ&ゼーネ」は1947年に「所有者なし」と判定され、国有化された。1950年代にはもう火葬用焼却炉の製造は、ツヴィッカウの「人民所有企業」に移行されていた。

そもそも東ドイツでは、「トップフ&ゼーネ」——新たな名称は「エアフルト人民所有企業 麦芽製造工場・貯蔵庫建造」——の歴史について興味を抱いたとしても、罪や責任は資本主義的な所有者に転嫁された。東ドイツは反ファシズムをもって自認していながら、この会社の歴史は1990年になるまで見直されなかったのである。

***エアフルト——会社の跡地とその未来**

その後、エアフルト市民とトップフ家の人たちが、きちんと記憶に留め過去と取り組む場所にするため、会社の建物を保存しようと尽力していたが、敷地は荒れ果てていた。明らかにエアフルト市は、市史におけるこの時期の重要性が充分理解できていなかったようだ。2003年末、「トップフ&ゼーネ」の跡地の重要な部分は、その歴史的意義ゆえに、文化財として保護を受けるようになった。